

ナイアガラの瀧は、北米に於いて最も規模の大いなる瀧とせらる。高さはさしたる事はなけれど、單獨の川より出づる瀧としては最大級にして。カナダ側の瀧の落差は五十三メートル、幅は六百七十メートルなり。これに比し、アメリカ側の落差は二十一から三十四メートルにて、幅は二百六十メートルに過ぎず。半世紀前、米國の首都ワシントンに在住中、ある夏休みに家族にてナイアガラに旅行す。アメリカの國土巨大にて、かなりの距離を走行せるもなかなかカナダ國境附近にあるナイアガラに著かず。子供ながらいささか高速道路のドライブには飽きつ。ナイアガラに到着するに、手傳ひの女性。パスポート不携帯のこと判明し、カナダ側に渡りて米國側よりはるかに大いなる瀧を見ること叶はざりき。ただ、船に乗船し瀧の真下にて見物す。壓倒的の水壓にて、義務とて購入のレインコートなどは役に立たず、ほぼず濡れになりけり。

二度目のナイアガラ観光は、その數年後、再び家族とともにカナダの大使たりし牛場家をオタワに訪問の時なり。但しその時は途次立寄りつるケベック市のフランス調の印象強烈にて、瀧の事あまり記憶に残らざりき。

三度目は妹夫婦トロント在住なりとて、女流辯護士の友人と訪る。ナイアガラの瀧観光する前にと、ナイアガラ・オンザ・レイクの街案内す。この町は最初の總督官邸置かれしところにて、一八四〇年代に建てたる英國風の建物多く現存し、洒落たる町と見受く。義弟の車はまるで装甲車のごとき四輪駆動のドイツ車にて名前はゲレンデ・ヴァーゲンと記憶す。後部座席は乗り心地いかにも悪く、カーブ曲がるたびに何處かに掴まり居らずば横滑りす。トロントの冬は積雪多ければ、かかる車に乗るも必要なれど、乗用車のごとき座り心地はまつたくなく、降りて初めて安堵したりき。天候もワインに適當なるかな、ワイナリー多く、義弟もセラ―所有とて、そのレストランにて晝食を攝る。確かに白ワインは格別なりき。ドイツ人の義弟は身長一八三センチ體重百キロもある大男にて、運轉するにも拘はらず、しつかり飲むも、酔ふ氣配一切なかりき。ナイアガラの瀧は正に壮大にて、ゴーゴーと流れ落つ。さほど高かからずと言へども、その水量の多さに壓倒せらる。近づけば、放出の大量のマイナスイオン、いと氣分良かりき。瀧の裏側観光したれども、曾て船にて瀧壺に近づきし時よりは濡れ鼠にはならざりけり。

東京に戻りて直後に氣功の稽古あり、師範に「いつたいいづこよりかくの如く凄まじき氣を貰ひたりや」と聞かれ、分かる人には分かるものなりと感心しつ。ナイアガラに旅行したりと告ぐれば、師範「やはりね」と一言。